

さざなみ

国語教室

さざなみ国語教室
 第450号 2019年9月25日
 発行者代表 吉永幸司
 連絡先 大津市柳川2-11-5
 TEL 077-522-1008
 発行所 滋賀児童文化協会
 NPO 現代の教育問題研究所

声を失う

長江 柳子

「ご主人は、喉頭癌のため喉頭全摘手術となります。話すことはできなくなりませう。」

昨年9月に、日赤の医師からこう告げられました。その頃私は、まだ現役であったので毎日が忙しく、ゆっくり話すことも無い日々でした。また普段から寡黙な夫であったので、話すことができなくても、命があればと思っていました。医師の話聞いた私は、「歌手のつんくさんと同じですね。」と応えていました。つんくさんは、声を失うという、歌手にとつて致命的な出来事でも、筆談やパソコンを使って講演や作曲を続けておられました。その姿に、努力すれば人は色々な可能性を持っていることを教えてもらいました。夫は数年前に定年退職した後、京都女子高校で数学を教えていました。声が枯れて出なくなってきた夫へ、ビデオスモーカーだった夫

に、病院へ行くように何度勧めても、風邪だからと一年間そのままにしていました。その間に、癌は相当進行してしまっていました。教師にとつても声を失うことは致命的な出来事ですので、すぐに仕事を辞め治療に専念しました。今は、小さい声なら少しは聞きたることができそうですが、込み入った話や長文は筆談です。

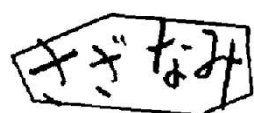
私もこの3月に定年退職し、時間にゆとりのある日々が始まりました。夫と会話をする時は、口元を良く見て内容を理解しようとしています。「人と話をする時は、相手の目を見て話をしましょう。」と子ども達に指導していました。が、今は毎回の会話がそうなくなっていきます。定年後に、夫婦で相手の口元を見て真剣に会話をしているのは、恐らく喉頭全摘手術を受けた皆さんののではないか(?!?)と

密かに思っているこの頃でもあります。

以前、障がいを持った方が、「障がいは、不便ではあるけれども不幸ではない。」と書かれていた本を読んだことがあります。今はそれがよくわかります。電車に乗っても買い物にしても、人と関わる時には会話が必要です。しかし、相手から反応が無ければ嫌な気持ちになります。先月、山を歩いていた時に、向こうから来られた方が、「こんにちわ」と挨拶されましたが、先を歩いていた夫は無言でした。何も言わないのは失礼でしよ。と思つたのですが、あつと気がついて、言えないのだと反省したことがあります。これは、不自由です。ただし、話せないことを、身振り手振りで、あるいは私が伝えることによって、相手の方はわかつてくださいます。わかつた上で、夫に必要な対応をしてください。

話せないことは、不自由で不便です。しかし、その不便さを前向きにとらえていくように日々を過ごして行きたいと思つています。今、夫は摘出手術をされた方々と食道からの発声法を練習しています。食道発声法を練習している夫と、先日産まれたばかりの孫と、どちらと早く会話できるようにするのか楽しみでもあります。そして、すぐに話が出来るという当たり前のことが、こんなにも有難いことだったのだと改めて感じているこの頃です。

(前京都女子大附属小学校教頭)



▼見事な研究成果を授業記録を基に発表される研究会に参加することが多い。日々の積み上げが子どもを育ててこられたことに実践の大切さを感じながら資料に読み浸る。その中で、最近、心に残っているのは、目の前の子ども姿から育てたい学力の育成を目指した実践である

▼「なりふり構わず」という言葉の後に何かを付け加えるとすれば「作文を書かせる・音読をさせる」という言葉が思いつく。子どもと共に学習計画を立てる、対話や話し合いをさせる、評価をするという授業のシステムからは馴染まないように見える「なりふり構わず」である。が、意図するところは奥が深い▼漢字の指導は手間がかかる。話し合いが上手にできない。ノートが書けない。話が聞けない。さらには挨拶ができない等々。できないことを教室から数えてくると両手を超えるくらいの数はすぐに挙げられる。しかし、視点を変え「どのよう指導をしたのか」という面で考えれば途端に勢いがなくなる。読めないという実態があるのなら、読む指導を継続して指導をする。書けないのなら書く指導を徹底するという試みも大切である▼学力の三つの要素の一つ「知識・技能」は積み上げる粘り強い指導により習得・習熟ができる学習内容が多い。だからこそ「なりふり構わず」実践する時間と手間をかける意味と価値がある。

(吉永幸司)

書く言語環境の整備
西條 陽之

教室にあると便利なものとしてホワイトボードがある。私は特に60cm×80cmの大型のものを愛用している。紙ベースのものよりも抵抗感が少ないため、普段なら手が止まってしまいう子も「ちよつとやってみようかな」という気にさせることができる。班による話し合い活動では考えを列挙してグループや思考の整理ができる。手順を並び変えたり矢印で関係を明らかにすることはアンプレグドブログラミングの導入に適している。係活動の掲示板としても重宝している。お知らせを書き込んだり、アンケートを募ったりと情報への扱い方を学ぶ環境づくりの一助となっている。

た。グループでマーカーをバトンがわりに、大きく丁寧に熟語を書いていく。誰かが書いた熟語に対して「あ、それもあつたか」といったつぶやきがあつたかと思えば、必死に辞書を引きながら書き手をサポートする子がみるみるうちに増えていった。ホワイトボードに埋められていった熟語の数々をデジタルテレビに映して鑑賞しその日の授業を終えた。

書くことに抵抗感、苦手意識を持つ子は多い。少しでも「やってみよう」と思える授業づくりのためにも言語環境の整備は重要であると考えている。学習用語を掲示したり、いつでも原稿用紙がすぐに用意したりすることで書くことのハードルを少しでも下げていくこと、そして、回数を重ね自信をつけることが重要である。ホワイトボードはどちらかと言えば楽しさを演出するツールであるが、その楽しさは仲間とのコミュニケーションに裏付けられたものなのではないか。主体的に対話的な書く活動を実現するためにもさらに活躍してもらおうと思う。

(大津市立小野小学校)

武佐小の国語教室

高野 靖人

NPO法人「現代の教育問題研究所」の事業の一つとして、夏休みに行う近江八幡市立武佐小学校での「国語教室」も、今年で三年目を迎えた。

一年目の様子は、この機関誌四二五号(2017年9月発行)で私が記した。

三年目となる今年、大きく変わったのは、会場が学校でなくなつたことである。学校近くの「武佐コミュニティセンター」が会場となつた。

参加は予約なしの自由参加なので、人数の予想がつかない。

開催は、二回。まず、八月八日(木曜日)。一応、二部屋に机・椅子を並べる。二十名程度入れる用意をした。吉永理事長、森副理事長、山田先生、私の四名である。

実際は、児童クラブが、指導員の引率で全員参加してくれた。四十名程度。他に当日参加の子どももあり、椅子を運んだり、プリントの追加コピーをしたり、対応に追われた。

部屋は、低学年と中学年以上に分かれた。私の吉永理事長と一緒に担当した中学年以上の学習を紹介する。

「文字のかいだん①」は、おなじ言葉の二文字から五文字を考えるもので、①は、「あ」から「か」まで記入する。「あ」は、全員で考えた。「あき」「アイス」「あさ

がお」「あおいそら」。「い」からは、自分で考えるのだが、やはり「五文字」に苦労する子どもが多かつた。全部書けた子のプリントは、赤ペンで丸を付け、「五文字」の言葉を紹介したりした。

大体できたところで、「ことばの三角形」プリント。これは、同じ言葉から始まる言葉や文章を「五文字」以上考えるもので、一応「十七文字」まで書けるものだ。どの言葉から始めるかがポイントとなる。「文字のかいだん①」を参考にして「あ」から始める子どもが多かつた。

最後は、「三文字しりとりに」「ゴリラ」←「ラッコ」のように続けていく。最初の言葉が示されているので、考えやすかつたようだ。

二回目は、八月二十三日(金曜日)。前回より少し広い部屋を準備したが、土砂降りだったので児童クラブも歩いてくるのが難かつた。それでも車での送迎で、四十名以上が参加してくれた。

「文字のかいだん②」「詩の作り方」「三つのねがい」「四文字しりとりに」「三つのねがい」作文は、自分の願いを自由に書くものだが、三つとも「お金がほしい」と書いた子もいた。「宝くじがあたつてほしい」など。中学年なので、スポーツ選手になりたいというのは案外少なく、「ユーチューバーになりたい」「保育園の先生になりたい」が数名あつた。二回目は、児童クラブのみの参加だったが、にぎやかな「国語教室」となつた。

(さざなみ国語教室同人)

子どもの宇宙こそ！
夏休み
子ども俳句教室その2
好光幹雄

京都市長賞(学校名略・数句紹介)
・木のうらの ききようは少し
さみしがり 神谷遥香3年生

京都市教育長賞
・さるすべり 赤、白、ピンク
あまいかな 須藤羽菜2年生

NHK京都放送局長賞
・ぜん寺で みななかよしの せ
みしぐれ 田中花穂3年生

・風鈴が とてもすてきだ きれ
いな音(ね) 郡山幸大5年生

「お寺には四季それぞれ美しい
花が咲いています・この一
輪咲いている青紫の花も綺麗で
すね。名前を知っていますか？」
「桔梗です。」
「はい、よく知っていましたね。
このお寺にはたくさん咲いてい
ます。後で探してくださいね。」
興聖寺境内を少しまた移動して、
「ほら、綺麗な花が咲いています
ね。赤、白、ピンク、綺麗です
ね。どの色の花が好きですか？
この花は百日紅(サルスベリ)
と言います。どうしてサルスベ
リと言いか知っていますか？」
「????」
「この木に登ろうとしても、猿で
さえ滑るほど木の幹がつるつる
しているからですよ。ほら、幹
を触ってみてくださいね！」
「今度は、三十秒間、目をつむっ
て何が聞こえるか。では。」
「はい、三十秒経ちました。何が
聞こえましたか？」「蟬の声。」

「はい、凄いな、蟬の声ですね。これ
を蟬時雨セミグレと言います。」
日常、見聞きできる花や蟬の声
の体験は新鮮だったのでしょうか。
言葉を知ることでそれらが一層身
近に感じられる鮮明に見えるはつきり
と聞こえたのかも知れません。子
どもが未知なる神秘的な宇宙と遭
遇した場面です。更に言葉を通し
てその宇宙体験は貴重な経験とな
りました。その後、風鈴作りとけ
ん玉遊びを各自選んでしました。
ペットボトルにマジックでデザイ
ンして出来上がった風鈴は、その
透明感もありガラス細工の風合
いで個性豊かな作品に。風鈴の音で
涼を取るということも無くなりか
けてきた昨今、風鈴作りはこれも
また子どもたちにとって初めての
新鮮な体験だったのでしょうか。け
ん玉は学校でもしますがけん玉名
人の技に感嘆の声。自慢気に技を
披露したりチャレンジする子。風
鈴作りもけん玉も、日本の伝統的
な文化に触れると共に、子どもた
ちのやり抜く力(非認知的能力)
が発揮される場ともなりました。
このように子どもたちと一歩一
歩立ち止まり、目にするものを再
度見る、雑然とした音に集中して
耳を傾ける。「見ている」という
ことと「見えている」ということ、
「聞いている」ということと「聞
こえている」ということは、根本
的に違います。日本人が胡麻粒の
ような小さな花をも美しいと感動
し、外国人の多くには雑音のよう
にしか聞こえない虫の音にも耳を
傾け心を癒すことさえできるの
は、虫の音を「聞いている」ので
はなく虫の音が「聞こえている」

花を「見ている」のではなく花が
「見えている」からなのです。私
達は日本文化の良き伝統の中で、
もそのものをありのままに見ると
いうことや全身で耳を傾けるとい
うことを自然にして来た訳です。
しかし、生活様式の変化、教育
の上部だけの生産性や効率化を求
める風潮の中で、その良き伝統が
崩れかけています。私たちは、そ
のような危機意識の中で、子ども
たちの心の中に、自然な形で、こ
の良き伝統を伝え、培い、広げ、
子どもたちが将来に渡って、人と
して豊かな感性で生きる礎を築く
一助になればと願うのです。
とここで、「才能無し」等と毒
舌で酷評する俳句の指導が、恰も
本物の指導だと誤解され持て囃さ
れる現状を皆さんは如何に思われ
ますか。あのような指導を真似て、
子ども作品を否定する指導を現
場で見てきた私には、許されざる
愚行。子どもの豊かな宇宙を壊し
ているのです。添削も作者自身を
尊重しない軽薄なもの。啞然とし
嘆くのは私だけなのでしょうが。
最後は爽やかに。参加した保護
者・関係者から数句紹介します。
(子どもの俳句は前号紹介済み)
かぶとむしつやひかるちよこ
レート(仲屋麻希子)かぶとむし
はじめてふれる我が娘(山西良一)
風鈴に色とりどりの風生まれ(川
端建治)大股の和尚に桔梗静かな
り(高丸もと子)石畳亡き父と行
く百日紅(織田智永)蟬探す天に
向ける喉仏(吉永幸司)夢探す
子等の瞳や雲の峰(好光幹雄)
参加者関係者全ての皆様へ、深謝。
(さざなみ国語教室同人)

編集後記

▼8月例会
(四四九回)
「第47回国語
研究集団合同研究会」(大阪たか
つガーデン) 研究主題「(個)の
学びを支える教師の支援と(主
体的対話的で深い学び)の実現」
▼研究発表では、竹の会は「大泉遙香
さん(明石・大久保小) 東風の会
は北村峯彦さん(仁川学院小) さ
ざなみ国語教室は蜂屋正雄さん
(滋賀矢倉小) パネルディスカッ
ションは中川洋さん(仁川学院小)
北島雅春さん(笠縫東小) 西田淳
(奈良女子大附属小)。全体総括
を川端建治さん(竹の会会長)▼
蜂屋さんの提案は「自分の力で伝
える力の育成へ」〇分間作文を通
して子どもにどんな力がついての
かである。書く力を育てるには、
書くことの経験が大事である。が、
いつ書かせるか、何を書かせるか
ということについて課題がある。
蜂屋さんは、毎日一〇分間継続し
て「書くこと」の指導を積み上げ、
文章量を目安に子どもの伸びてい
く姿をまとめた。▼成果として①
書くことを継続することに書くこ
とへの抵抗が少なくなった②継続
して書くことは書く分量の増加と
いう成果があった③分量が増える
と分量も内容も向上する④学級経
営においても効果がある▼蜂屋さ
んの研究発表及び協議においては
司会を好光幹雄さん(元小野小)
助言を吉永が行った。協議では書
くこと育てる力と見通しに話題が
広がった。
▼巻頭には、長江柳子先生から、
玉稿をいただきました。深謝。
(吉永幸司)